



マナビDX Quest PBL・協働プログラム

2022年度参加者の声

2024年3月

デジタル人材育成プログラム「マナビDX Quest」の参加者の声を公開

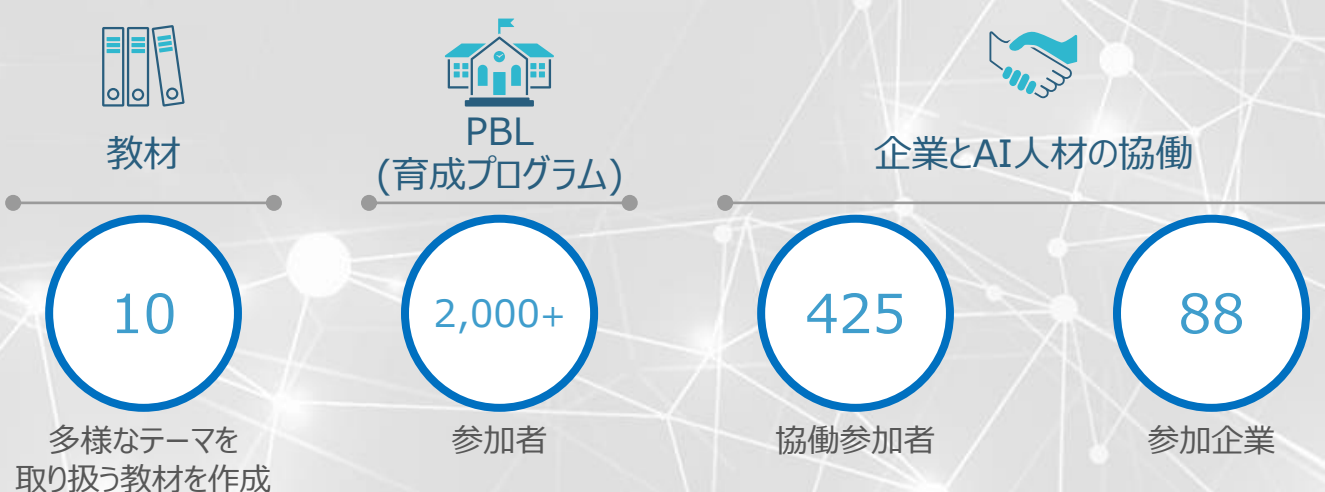
経済産業省は、「人材不足の解消」と、「人材育成を通じたDX推進」を実現することを目指し「マナビDX Quest」事業を実施しました。
当事業に参加した企業・修了生・修了生所属企業からの声を公開します。

当事業の背景/これまでの取り組み

「デジタル田園都市国家構想」の実現に向け、地域の企業・産業のDXを加速させるため、デジタル人材の育成・確保するためのプラットフォームの構築とデジタルスキル標準の整備を行ってきました。地域企業・産業が生産性を向上し、付加価値を生み出していくためには、DXの実行が不可欠であり、地域の企業・産業のDX推進の担い手となるデジタル人材の育成・確保は依然喫緊の課題です。

AI Quest(2019～2021年度)および当事業「マナビDX Quest」(2022年度～)では、AI実装スキルおよびDX推進スキルを持つ人材の育成やコミュニティ形成を行うとともに、中小企業と育成した人材とが協働して課題解決にあたるプログラムを実施してきました。

2022年度の当事業の成果



ビジネス～デジタルスキルを一気通貫で学べる教材を作成し、講師無しの学び合い(PBL)を通じて、デジタルに関する知識・経験だけではなく、課題解決能力や具現化・実装能力を持った人材育成をしました。また、当事業で育成した人材と地域の中小企業が約2ヶ月間、オンラインでプログラムを実施し、課題解決に取り組みました。

取り組み内容・成果の詳細は、"[経済産業省ホームページ：「マナビDX Quest」について](#)" をご参照ください。

インタビュー記事の構成

＜参加企業の声＞

参加企業の声

旭川信用金庫
経営企画部 DX戦略室 古田真之さん (1/3)

事業概要

- 地域金融機関
- 所在地: 北海道旭川市
- 創立: 1914年
- 従業員数: 約380名

取組み概要

- 社内DX推進のためのロードマップ策定
- 理想とするネットワーク構成図の作成
- 課題解決に向けたスキルマップと研修モデルの策定

“**新設されたDX戦略室の担当として、DXの具体的な進め方について悩み、仲間を求めて参加**

弊社では、2022年に業務改善プロジェクトから派生してDX戦略室ができました。私はその担当だったのですが、当時はDXといっても、やる気はあるのですが、**どこから手をつけたらいいの、進め方はどうするのか、手探りで分らない状況でした。**そんな中でマナビDX Questを知って、受講生としての参加と協働企業としての参加、2つの方法があることがわかり、まずは協働企業として参加してみようということにしました。業務改善プロジェクトには各部署からの兼務で13人ほどメンバーがいたものの、DX推進専任の担当はわたし1人でしたので、一緒にDXを推進する仲間が欲しいという思いがありました。

7

企業名・ご担当者名

事業概要・本プログラムにおける取組み内容

インタビュー内容

- ・「参加のきっかけ」
- ・「得られた成果」
- ・「感想」

＜修了生の声＞

修了生の声

トヨタ車体株式会社
デジタル変革推進部 デジタル企画・推進室 水谷友彦さん (1/4)

経歴/ご経験

- 学生時代は工学部で機械工学を専攻、研究・サークル活動を通じてロボット製作に情熱を注ぐ
- マナビDX Quest参加時は、勤務先でスマートファクトリー化に向けたDX推進業務を担当
- 2024年からは全社のDX推進部署に異動、社内のDX人材育成業務に従事

“**DXの旗振りだけのもどかしさを脱するために、課題解決の実行力を身につけたいと思っていた**

マナビDX Quest参加前は、工場のDXリーダー・DXの旗振り役を務めていました。工場のDXリーダーは、デジタル教育、システムのマニュアルづくり、改善の指導など何でもやります。ですが、**問題解決を実行するのはあくまでも現場の方々。私にできることは解決ツールを紹介するところまでで、正直もどかしさがありました。**根本から課題を掘り下げて解決まで行う実行力を身につけたいと思っていました。そんなときにマナビDX Questを見つけて、**「具体化のプロセスをとことん学べる」という部分が当時の自分にもすごく刺さったので参加を決めました。**

29

所属企業名・参加者名

経歴/ご経験

インタビュー内容

- ・「参加のきっかけ」
- ・「修了後の活躍」
- ・「得られた成果」
- ・「感想」

目次-1/2

<参加企業の声>

旭川信用金庫
(地域金融機関)

古田真之さん

北海道

DX推進ロードマップ策定で社内のDX機運醸成に寄与

P.6

株式会社スザキ工業所
(自動車向け部品製造 他)

鷺崎圭一朗さん

岐阜県

生産計画の効率化でDXの威力を実感

P.10

山西水産株式会社
(ふぐ・一般魚の加工販売)

山西伸典さん

山口県

EC受注処理の自動化の成功で業務改善文化が醸成

P.15

<修了生所属企業の声>

大鵬薬品工業株式会社

今岡忠さん

東京都

社員約50名で参加し、"教え合いカルチャー"が醸成

P.19

株式会社ヘルスケアシステムズ

大矢寛子さん

愛知県

社内に学びが伝播し、建設的な意見が出てくる組織に変容

P.23

目次-2/2

<修了生の声>

トヨタ車体株式会社	水谷友彦さん	問題解決能力アップを実感、社内キャリアアップで全社DX推進部署へ	P.28
愛三工業株式会社	池田新二さん	社内公募で研究開発部からDX部署へのジョブチェンジを達成	P.33
jinjer株式会社	山田ふみのさん	DX推進者の輪を広げる企画を立ち上げるなど、DX支援に携わるように	P.37
個人事業主	戸田和子さん	DX推進を支援する「おかんDX」で起業準備中	P.41
中部国際空港株式会社	宮野孝汰さん	転職しDX推進部門へ。データ活用やAIモデル作成など幅広く担当	P.45



旭川信用金庫(北海道) の取組み

参加企業の声



旭川信用金庫 経営企画部 DX戦略室 古田真之さん (1/3)

事業概要

- 地域金融機関
- 所在地：北海道旭川市
- 創立：1914年
- 従業員数：約380名

取組み概要

- 社内DX推進のためのロードマップ策定
- 理想とするネットワーク構成図の作成
- 課題解決に向けたスキルマップと研修モデルの策定

新設されたDX戦略室の担当として、DXの具体的な進め方について悩み、仲間を求めて参加

弊社では、2022年に業務改善プロジェクトから派生してDX戦略室ができました。私はその担当だったのですが、当時はDXといっても、やる気はあるのですが、**どこから手をつけたらいいのか、進め方はどうするのか、手探りで分からない状況でした。**

そんな中でマナビDX Questを知って、受講生としての参加と協働企業としての参加、2つの方法があることがわかり、まずは協働企業として参加してみようということにしました。業務改善プロジェクトには各部署からの兼務で13人ほどメンバーがいたものの、DX推進専任の担当はわたし1人でしたので、一緒にDXを推進する仲間が欲しいという思いがありました。



旭川信用金庫 経営企画部 DX戦略室 古田真之さん (2/3)

“

受講生との協働を通じてDX推進ロードマップを策定し、具体的な今後のアクションを役員を含めて合意できた

協働で受講生と共に作りあげていった内容はDX推進のロードマップ、望ましいネットワーク構成、人材スキルマップと多岐に渡り、豊かな議論ができました。**最終的には役員の前で発表し、DXで具体的に何をしていけば良いのかが明確になりました。社内のDX機運の醸成にも寄与できた**と思います。

協働のチームは多様な専門性をもった5人のチームでした。共に検討を進める中で多角的な視点でDXを考えることができ、DX担当として本当に学びになりました。毎週日曜20時、私も業務時間外に参加し、互いに情報と情熱を開示し合う良い関係で進められました。

社内でDX機運が醸成されたことから、新規事業の立ち上げなどの新たな動きが起こった

協働を通して、DX機運が醸成されたことが社内の新しい動きにつながったのではないかと思います事例もあります。

例えば、お客様と向き合う課題解決推進部が中心となって、CEspaceさんという企業と協業し、首都圏のデジタル人材と旭川地域の企業さんの課題解決をマッチングするという新規事業が立ち上がりました。協働を通して、外部人材を活用することで成果を上げられることが経営陣に伝わったことも、この事業の立ち上げに繋がったのだと思います。



旭川信用金庫 経営企画部 DX戦略室 古田真之さん (3/3)

“

また、システム部門が中心に進めている新たなネットワーク構想。これは個人情報保護などの観点から極めてクローズドになりがちな信金のネットワークを、もっと他のシステムとシームレスにつなげられるようにしようという動きです。協働でネットワーク構成図を検討したことで、議論の土台ができたのだと思います。

翌年には受講生としても社員複数名が参加することで、学びを深めている

2023年には社内で公募をし、私を含めて5名（システム担当2名、戦略担当2名、営業担当1名）が受講生としてもマナビDX Questに参加しました。**外部の方と同じコミュニティで学び合うということは、地域の信金にとっても貴重で学びが広がる機会になっています。**



株式会社スザキ工業所（岐阜県）の取組み

参加企業の声



株式会社スザキ工業所 DX推進担当 鷲崎圭一郎さん (1/4)

事業概要

- 金属プレス、溶接、組立加工全般
金型 治具、設備、制御装置の設計製作
プレス関連機器製造販売 他
- 所在地: 岐阜県各務原市
- 創業: 1979年
- 従業員数: 約60名

取組み概要

- 信号かんばんの自動読み取りによる追跡率の向上
- 属人化されている生産計画業務の自動化

バーコードの読み取り成功率を上げることを期待して参加

弊社は主に自動車向けの車体部品の製造を行っており、トヨタ生産方式で“かんばん”（生産指示標）をリレーしながら生産しています。企業協働に申し込もうと思ったきっかけは、**かんばんにつけたバーコードの読み取りの成功率を上げたい**というところでした。その先に、**生産計画を効率化できたらいいな**という思いがありました。



株式会社スザキ工業所 DX推進担当 鷲崎圭一郎さん (2/4)

毎日2時間半かかっていた生産計画を30分に短縮し、残業工数は月30時間減。
納期遵守率も20%向上と満足の結果。DXの威力を実感。

会社のことで見せていけない部分はないという方針のもと、フルオープンで相談しました。そのように協働を進める中で、当初はまだ先の目標だと思っていた「生産計画の自動化」を実行しようということになり、社長には1から10まで説明しました。**最後の社長への報告会では、社長から「やるぞ！」とGOサインが出まして、社長の本気を感じた瞬間でもありました。**協働で教えてもらったDXツールを、協働後に私のほうで引き継ぎ実装したことで生産計画を効率化できたのですが、自分ひとりではこのDXツールには辿り着けなかったので非常に感謝しています。

生産計画は、慣れている担当者でもデイリーベースで1時間半かかるうえ、他の者では4時間もかかります。もし担当者が長期離脱するようなことがあれば、納期に間に合わないということで危機感がありました。ところが、**効率化後には1日30分で完了するうえ、複雑な組み合わせから最適な計画を出力できるのでとても効率が良く、残業工数は月で30時間ほど減り、納期遵守率は20%ほどアップ**しました。

運用に必要なマスタ登録等は私がコツコツ行い、運用開始までに4ヶ月かかりましたが、結果として担当は楽できるんだという思いで実行しました。**今では、生産計画を変更すると、作業者たちはすぐに綺麗なモニタ表示で確認することができ、同時に役員にも見てもらえるという状態を実現できていて、DXの威力を実感しています。**



株式会社スザキ工業所 DX推進担当 鷲崎圭一郎さん (3/4)

“

生産計画におけるDXの成功体験から社員のモチベーションが向上し、継続的にDX推進に取り組み

もう1つの成果はDXの定着です。**生産計画でDXの成功体験ができたため、社員がDXの進め方を理解して継続的にDXに取り組めるよう**になりました。たとえば協働を進める中で、プロジェクトの連絡のためslackを導入したのですが、その便利さが社員にもじわじわと伝わっていききました。**紙で管理していたところから考えるとその次はエクセルでとなりがちですが、紙で管理しているものがクラウドに変われば、社内の報告も生データのままモニタで即社長報告もできるので非常に便利です。**

毎日同じ仕事を繰り返していると頭が凝り固まってしまいますが、**協働のような機会があると、たとえば「一時的に工数が増えてしまうけどDXで後々自分も楽できるな」と想像できるなど、今より良い状態になるように頭が切り替わります。DXをあまり重くとらえず、失敗してもいいやというマインドに変わったのは大きな変化です。**



株式会社スザキ工業所 DX推進担当 鷲崎圭一郎さん (4/4)

“

利害関係のないフラットなコミュニケーションから、DXのヒントを得ることができる

協働するチームを選ぶときはあえてメンバーに工場経験者がいないチームを選びました。そのほうが先入観なくゼロベースで工場のDXに取り組めると思ったからです。実際「かんばんって何ですか？」というところから、いろいろな角度からの質問をいただいたので、業務を整理する良い機会になりました。

チームには、統計に詳しい方、DXツールに詳しい方などいろいろな分野の方がいらっしゃいました。弊社が地域のファミリー企業なのでより一層、弊社のことを知らない・**会社の利害関係がない方達ということで、安心して相談できました。ぽろっと喋れるようなところにDXのヒントがあったように思います。**



山西水産株式会社(山口県)の取組み

参加企業の声



山西水産株式会社 代表取締役社長 山西伸典さん (1/3)

事業概要

- ふぐの加工販売、一般魚の加工販売
- 所在地：山口県下関市
- 創立：明治12年
- 従業員数：約10名

取組み概要

- ECにおける受注業務におけるボトルネック箇所特定
- EC受注処理の自動化
- 売上データの分析、活用方法の検討と販売戦略策定

歴史ある会社新しい風を吹き込むチャンスだと考えて参加

私達の会社は、明治十二年創業で、下関のふぐを扱っている歴史ある会社です。私が先代を継ぐにあたり、何か新しいことを始めなければと思っていました。そこでDXを知り、自動化ツールの勉強を始めたばかりのタイミングで、マナビDX Questの話を聞き、**伝統業である自分たちのビジネスに新しい風を吹き込むチャンスだと捉えました。**自分で勉強はしていましたが、もっと深く、広く学べる機会があると知り、参加しました。



山西水産株式会社 代表取締役社長 山西伸典さん (2/3)

通販サイトの受注処理の自動化に成功、本質的な業務に集中できるようになった

協働で最初に手をつけたのがECサイトの受注処理自動化でした。意外と手間がかかる受注処理が自動化でき、**毎日20分かかっていた作業がボタン一つで完了するようになりました。**この変化は小さなことかもしれませんが、日々積み重ねる業務としては大きな進歩です。**得られた時間で新商品の登録など、売り上げ向上に直接つながる作業に集中できるようになりました。**この時、目に見える形で、DXの力を実感しました。

会社全体で起きた意識変容がなによりのインパクト。業務改善文化が根付きはじめている

しかし、一番大きかった変化は、**会社全体でDXに対する意識が変わった**ことです。自動化ツールを使ってみて、**社員みんなが「もっと効率的にできるんじゃないか」「こんなことも自動化できるんじゃないか」と、自分たちの業務を見直し始めました。**

DXとは、単に新しいツールを導入するだけではなく、このようにみんなの意識を変え、業務改善につながる文化を作っていくことだと思います。**協働への参加を通じて、業務改善文化が少しずつでも自分たちの会社根付き始めていることを実感しています。**



山西水産株式会社 代表取締役社長 山西伸典さん (3/3)

“

ロケーションや業種を越えた多様な人々との交流が、新たなヒントをもたらしてくれる

このプログラムに参加して、技術的な学びだけではなく、他業種の人たちと出会えたのも、とても新鮮でした。いろいろな人と話すことで、自分たちの業務に活かせる新しいアイデアをもらったり、異なる視点を知ることができました。特に、都市部で働く人たちとの交流は、普段の自分の業務では経験できないことです。**DXを進める上で、社外の多様な人々との交流が新たなヒントをもたらしてくれることを強く感じました。**自分たちの会社だけでなく、自分自身の成長にもつながる、本当に価値ある経験をさせてもらいました。このような成果を実感できたので、2023年度も再度協働企業として参加しているところです。



大鵬薬品工業株式会社(東京都) の取組み 修了生所属企業の声



大鵬薬品工業株式会社 デジタル・IT統括部 ビジネスデザイン課 今岡忠さん (1/3)



経歴/ご経験

- ・ 2015年4月 大鵬薬品工業株式会社に入社。創薬化学の研究員として新薬の化合物探索研究に従事
- ・ 2020年7月 経営企画部に異動、DX推進の業務を担当
- ・ 2023年1月から現在の所属で全社のDX推進・人財育成といった領域の業務に従事している

「全社DX担当として、DX人材育成の機会を求めて、またDX推進に向けて対話の引き出しを増やすために参加

マナビDX Questに参加したきっかけは、**全社のDX担当としてDX人材を増やすために学びの機会を探していた**ことです。社会の変化速度が増す一方で、定年後の再雇用など就労期間は長くなる中、どのように社員をDX人材としてリスクリングしていくかは課題でした。

また、全社のDXを進めるにあたっては、各部署と対話するようという社長の方針があり、各本部長とどのようにDXを進めていくか対話を重ねていました。現場の納得感がないとDXは進みません。そこで、適切なツールを提案したり、外部環境の変化を考慮した将来的な取り組みについて検討をするといった、**DX推進に向けた対話の引き出しを増やしたい**という思いもあって、私含め複数名でマナビDX Questに参加しました。



大鵬薬品工業株式会社 デジタル・IT統括部 ビジネスデザイン課 今岡忠さん (2/3)

“

データ処理の考え方を学ぶとともに、DXの多様性を知ること、全社へのDX導入推進力が増した

私はAI系のPBLに参加して、販売予測や工数予測などをテーマに、データ処理の考え方を学びました。この学びが実務で活きたのは、**データ処理に不慣れな部署とデータ処理に関する業務で協業をするとき**です。薬品の研究所などはデータ管理も厳しくデータに強い人材が多くいるのですが、一方で、例えばコーポレート部門などはデータ処理に不慣れな方もいるので、時には私がデータ処理を手伝うこともありました。ただ、やはり自分でできる人が増えた方が良いということで、BIツールの使い方をサポートする際にPBLで学んだプロセスがとても参考になりました。

また個人的にとっても学びになったのはDXの多様性についてです。マナビDX Questでは相互評価課題があり、他者の回答を採点することはとても学びになります。同じ課題における回答を複数同時に見ることで、人によって予測精度の水準や、観点やまとめ方がこんなにも違うのかと分かりました。**DXを全社で推進していくにあたって、人によって考え方が異なるという前提で進めることで、推進力が増したと感じています。**

周りの受講生のモチベーションの高さに助けられ、多忙の中でも頑張れた

参加している受講生のモチベーションは予想以上に高く、良い影響を受けて自分自身も学びやDXについて前向きになっていきました。slack上で毎日の学習を報告される方や、いつも“もくもくルーム”(常時接続型コミュニケーションツールにおける学習ルーム)にいらっしゃる方など、モチベーションの高い受講生の方々からとても勇気をいただきました。



大鵬薬品工業株式会社 デジタル・IT統括部 ビジネスデザイン課 今岡忠さん (3/3)

また、課題の締切があるため、その期限に向かって頑張ることができるという、ある種の“強制力”も魅力です。自分自身は育児とも重なったので締切までに課題を提出するのが大変なこともありましたが、**受講生の中に育児中の仲間がいることで、なんとか頑張れました。**

企業内でもマナビDX Questへの参加を募り約50名が参加。 社内コミュニティが盛り上がり教え合いカルチャーが醸成された

自分で参加してみて総合的にとても良い学び場であることが体感できたので、**DX人材をもっと増やすために、2023年には全社で参加者を募り、およそ50名が自主的に参加**しています。業務外にも関わらずこれだけ多くの人に参加したのは、事前にデータ処理・読解テストを希望者400名が受けていたことが大きかったかもしれません。そのテストによって課題意識があるところに、ちょうどマナビDX Questの案内をしたため、ニーズにフィットしたように思います。

初学者にとってハードルが高いという課題は見えていたので、マナビDX Questのslackだけでなく、**自社のTeamsによる社内コミュニティを組み合わせて取り組みました。課題進捗状況を共有して、積極的に課題を進める雰囲気をつくり盛り上げています。**2023年には成績優秀者に社員から3人がランクインするなど、社内コミュニティの効果を感じています。

マナビDX Questをきっかけに、教え合いカルチャーが社内に根付き始めています。私一人が教える立場になるのではなく、後輩の社員を“先生化”して勉強会を実施したりするなど、**会社としてDXに対して積極的に取り組もうとする雰囲気が広がっています。**



株式会社ヘルスケアシステムズ
(愛知県) の取り組み
修了生所属企業の声



株式会社ヘルスケアシステムズ 研究開発部 大矢寛子さん (1/4)



経歴/ご経験

- ・ 2019年4月株式会社ヘルスケアシステムズ入社
- ・ 郵送検査の商品化に向けた生体マーカーの研究や実験のほか、大学や企業との共同研究に携わる
- ・ 自社が2022年にDX認定を取得したことをきっかけにマナビDX Questに参加

会社がデータを扱う事業にシフトするタイミングで、データ分析を幅広くできるようになりたかった

弊社は、郵送での尿検査などを行う、バイオ系のスタートアップです。保有している検査結果データは様々な活用できる可能性があるため、会社としてデータを扱う事業体にシフトしていこうというタイミングでした。

そんな中、会社からマナビDX Questの案内を受けて、社員70人のうち私を含め28人が手を上げ参加しました。弊社にはICT部(システム担当部署)もあるのですが、私が所属する研究開発部からの参加が一番多かったようです。私自身は**DXのイメージを持ちたかったこと、データ分析が幅広くできるようになりたかったこと、そして直感的にワクワクしたこと**から、参加を決めました。



株式会社ヘルスケアシステムズ 研究開発部 大矢寛子さん (2/4)

“

データ分析の引き出しが増える等、自身の業務で学びを実践できている

私個人の成果としては、普段の業務において「マナビDX Questで学んだやり方を使えばできそう」と、**データ分析のアイデアが出てくることが増えました。**

特に企業協働では多くの学びを得ることができました。協働した企業様はどこからDXに手をつけるべきか迷っている状態で、チームメンバーとも「DXツールを入れるだけではダメで、一番解決したい点を明確にしよう」と話し合いました。そうして不明瞭だった将来のビジョンや業務上の課題を明らかにした後、課題の優先順位付けを行う中で、**As-Is / To-BeというPBLで学んだフレームワークがとても役立ちました。この考え方はとても普遍的で、会社に戻ってからの業務でも生きています。**

また、協働のメンバーは、メーカー勤務、HP制作、DX部門の担当など多様なバックグラウンドの方々でした。**研究開発者である私も自分の特性をチームの中でどう活かすかを考える良い機会になりました。**



株式会社ヘルスケアシステムズ 研究開発部 大矢寛子さん (3/4)

“

社内働きかけること学びを伝播。建設的な意見が出てくる組織に変容した

DXへのチャレンジ精神も向上しました。例えば、データ分析に苦戦している同僚を手伝ったり、新しいDXツールが入ったらまずクイックに自分で使ってみてその後使い方を広めたり、お子さんがいらっしゃる社員向けに"学びの時短"として社内で勉強会を開き、マナビDX Questのエッセンスを弊社の業務に活かしやすいように抽出して広めたりしています。

また、社員の多くが参加したことで、会社としても期待以上の良い効果がありました。例えば、**データを取得しなければいけない意義が会社に広く伝わった**ことで、各部門で取得してほしいデータについてすんなり説得できるようになったとICT部から聞いています。**データの取得や活用について、こうしたほうが良いのではという建設的な意見が挙がるようにもなりました。**

その他、基幹システムの入れ替えを行うタイミングで、大きく手順が変わり社内不安も大きかったのですが、他の受講生と会話をする中で、他社の事例を聞いて役立ったということもありました。



株式会社ヘルスケアシステムズ 研究開発部 大矢寛子さん (4/4)

新しいことを学び挑戦する文化、更に部署を越えて学び合う文化で、新しい価値を作っていきたい

データを扱う会社に事業をシフトしていく中で、データについての学習機会を社員に提供したいと探していたところ、マナビDX Questを知り、組織のデジタル力の底上げになるのではと感じました。学習意欲はある組織なので、みんなで新しいことを学ぼうと社内に声をかけました。結果、社員の4割にあたる28名が参加してくれて良かったです。参加した社員はDXの見通しが得られたでしょうし、**実際に社内でもデータ分析の機運が盛り上がっています。なにより新しいことを学び挑戦していく文化が広がった**と感じていて、個人でITパスポートを取るなど、**リスキングしているメンバーが増えている**印象です。

中でも、大矢さんはとても変わりました。どんどん自分で学習しその学びを周囲に広げている姿は頼もしい限りです。社員の皆さんも、まずは大矢さんをロールモデルとして、そうして学びを広げてくれることで組織の底上げになります。

勉強会や部署を越えた企画提案の動きも非常に良い流れです。組織は分業するとどうしてもタコツボ化してしましますが、**部署を越境する学び合いの文化で新しい価値を作っていきたいです。**



株式会社ヘルスケアシステムズ
代表取締役社長 瀧本陽介さん



水谷友彦さん
修了生の声



トヨタ車体株式会社

デジタル変革推進部 デジタル企画・推進室 水谷友彦さん（1/4）



経歴/ご経験

- ・ 学生時代は工学部で機械工学を専攻、研究・サークル活動を通じてロボット製作に情熱を注ぐ
- ・ マナビDX Quest参加時は、勤務先でスマートファクトリー化に向けたDX推進業務を担当
- ・ 2024年からは全社のDX推進部署に異動、社内のDX人材育成業務に従事

DXの旗振りだけのもどかしさを脱するために、課題解決の実行力を身に着けたいと思っていた

マナビDX Quest参加前は、工場のDXリーダー・DXの旗振り役を務めていました。工場のDXリーダーは、デジタル教育、システムのマニュアルづくり、改善の指導など何でもやります。ですが、**問題解決を実行するのはあくまでも現場の方々。私にできることは解決ツールを紹介するところまでで、正直もどかしさがありました。**根本から課題を掘り下げて解決まで行う実行力を身につけたいと思っていました。そんなときにマナビDX Questを見つけて、「**具体化のプロセスをとことん学べる**」という部分が当時の自分にもものすごく刺さったので参加を決めました。



トヨタ車体株式会社 デジタル変革推進部 デジタル企画・推進室 水谷友彦さん（2/4）

問題解決能力アップを実感、社内キャリアアップで全社DX推進部署へ

参加してみて期待以上の学びがありました。教材の設定は架空ではあるもののとてもリアルで、実際の職場でも、ものづくりの現場を歩いて製造現場の担当と対話しながら、PBLで学んだ解決までのプロセスを当てはめていくことができました。現場へのヒアリングから始まることも実際の業務に近く、課題のヒアリング・優先順位づけ・優先的に取り組む課題の掘り下げ…と順を追って、PBLで学んだ考え方を実践することができました。特に、**人との対話から課題を掘り下げていけるようになったという点で、問題解決能力が上がったと実感しています。**

マナビDX Quest参加後は、**身についた問題解決能力を活かせること、なにより自信がついたことで、仕事に前向きにハツラツと取り組んでいました。**また、2022年に参加したPBLで総合2位の成績優秀賞をとることができたことなどは、上司との1on1でも報告していました。そんな様子を上司が見てくれたのか、**全社のDX推進部署へ異動となった時には、上司から「お前ならできるはず」と後押しをしてくれました。**



トヨタ車体株式会社 デジタル変革推進部 デジタル企画・推進室 水谷友彦さん（3/4）

“

現場の"リアル"を感じさせる高度な教材と、企業協働で更に実践的に学べる環境がある

マナビDX Questの良いところの1つは、とことんリアルな教材が用意されていること。たとえば画像処理PBLに参加したとき、きれいなデータだけでなく異常値など不要なデータも含まれていました。そういった“汚い画像データ”をきれいにする事も学べる教材はなかなかありません。参加者の中に画像の前処理に詳しいプロの方もいらっしゃって、その方の処理の仕方などは本当に多くの学びがありました。

もう1つの良いところは企業協働です。企業協働のメンバーは多彩でした。キントーンのマスター、現役コンサル、データサイエンティスト、定年後G検定E資格をとった中小企業診断士のメンバーがいました。そして私達が担当した企業様からは、一人では解決できない課題がたくさん出てくる。そんなとき各メンバーが強みを活かした多彩なアウトプットを見ることができ、そこから大いに学びを吸収できました。**自分一人では出せないアウトプットを出すことができ、「もっと勉強したいな」と強く思いました。**



トヨタ車体株式会社 デジタル変革推進部 デジタル企画・推進室 水谷友彦さん（4/4）

“

“教え合う”コミュニティ文化を知り、業務内外を越境しコラボレーションする新たな働き方を発見できた

マナビDX Questに参加して驚いたのが、“教え合う”ことで得られる学びの大きさです。最初は自分は受け身だったのですが、他の受講生の方が「勉強会やりましょう！」と声をかけ合っている様子を見かけ、なんでそんなことをするんだろうと驚きました。「なぜ無償で先生役をやるのですか？」とその方に聞いてみると、「反応がうれしい、それが学びに繋がるんだ」と仰っていて、なるほどと納得しました。ならばと、**自分も自社で学びのコミュニティを広げていくことにしました。**まずは社内でPythonの勉強会をやってみたところ皆さんに好評をいただいて、“教える”ことで、教えるスキルが上がるし、喜んでもらえるし、別分野に詳しい人から知らなかったことを教えてもらえるしと、“**教える”ってなんてお得なんだ**と思いました。

自社のコミュニティは、活動に賛同してくれた有志の協力もあり、Teamsで400人くらいのコミュニティになっています。皆さん、自分たちの現場のリアルな課題を持ち寄ってくれたり、それを聞きつけた人が集まったりして広がってきました。**自分からどんどん発言して巻き込んで、だんだん他にも先生役が出てくるなど、参加してくれる人がいるとコミュニティは楽しいです。**

先日は、社内コミュニティ内でChatGPTプロンプト大会を開催しました。そうすると隠れた人材が出てくるんです。こうしたイベントを通じて繋がりができた人に、仕事のことで相談を持ち掛けたり、コミュニティ内の発言を見て「このプロジェクトに参加しない？」と声をかけたりもします。活動を通じて社内に頼れる仲間がどんどん増えていきました。**これはマナビDX Quest以前にはまったくなかった流れです。転職をしたわけではないですが、この2年間でとんでもない変化がありました。**

良い経験をしています。



池田新二さん
修了生の声



愛三工業株式会社 グローバル生産管理部 生産管理室 IoT推進Gr 主任 池田新二さん（1/3）



経歴/ご経験

- ・自動車部品メーカーの研究開発部にて、有機材料開発、設計支援/不具合解析等に従事
- ・マナビDX Quest参加後は生産現場の課題をデジタル活用で解決する部署へジョブチェンジ

研究開発の仕事にAIを役立てるため、AIについてもっと深く学びたい

マナビDX Quest参加前は研究開発部に務めていたのですが、当時コロナ禍で新しい生活スタイルが始まり学ぶ時間ができたため、プログラミングのアプリでPythonを学び始めました。そこからAIの可能性に目覚め、研究開発部で「マテリアルインフォマティクス」（AIで材料開発を行う分野）を立ち上げようとしたところで、マナビDX Questを知りました。日本ディープラーニング協会さんのE資格はとったものの、**AIについてもっと深く学びたいと思い参加しました。**

社内公募で研究開発部からDX部署へのジョブチェンジを達成できた

AIに期待して受講しましたが、予想以上に学びになったのは実はビジネス課題のPBLでした。PBLでは、**現場部署の視点、経営者の視点、DXコンサルの視点、の3つの視点を深く学び、ビジネス視点がトータルにインストールされた**気がしました。そうしたビジネスの学びが社内ジョブチェンジの公募に応募するきっかけになりました。



愛三工業株式会社

グローバル生産管理部 生産管理室 IoT推進Gr 主任 池田新二さん（2/3）

“

社内公募に応募してみようと一番背中を押してくれたのが、受講生の方でした。PBLの課題の一環で書いたコードをコミュニティslackに投稿したところ、とても丁寧に添削してくれて、「**デジタルの世界にはこういうすごい人たちがいるんだ**」と感動して**自分もこういう人になりたいと思いました**。そうしてコードの書き方などを深く勉強していく中で、現在所属しているDX部署に応募しました。

社内公募でジョブチェンジした先は、全社の生産効率を上げるためにデジタルツール活用を推進する部署で、そのIoTグループというところに所属しています。**公募のときにアピールしたのは、AI技術をフックにして新しいテーマを探究していきたいということ、そして新しく手に入れたビジネス視点の考え方**です。出身の研究開発部だと学者肌で1つのことを突き詰めていく人が多いのですが、自分はそれだけでなく新しいことにも積極的に挑戦していく姿勢をアピールしました。「50歳になろうとしている自分でもジョブチェンジできるんだ」と自分でも驚きました。

自分の強みを尖らせるために自ら学びに出かける姿勢をマナビDX Questから学んだ

現在の部署では、6人で生産現場のDXツールの導入推進を担当しているのですが、会社全体ではおよそ3000人の社員がおり人手が足りません。そのため、6人がそれぞれの強みを尖らせ弱みを補完しあって仕事をしています。たとえば、私はエクセルやパワーBIなどは苦手なのでその領域が強いメンバーに入ってもらったりしています。逆に、私は**もともと培っていた設計支援の強みや、マナビDX Questの中で学んだビジネス視点からの課題解決、プログラミングの知識を活かしながら現場のDX化を推進しています**。この強みを尖らせるために必要に応じてその都度学びを深めています。



愛三工業株式会社

グローバル生産管理部 生産管理室 IoT推進Gr 主任 池田新二さん（3/3）

“

その都度学ぶ姿勢や、積極的に外部に学びに出かける姿勢は、マナビDX Questで培いました。マナビDX Questの受講生仲間が積極的に展示会に参加したり、勉強会を開催している姿に触発されて、**自分も会社の中でAIの勉強会を開いたり、日本ディープラーニング協会のコミュニティ活動にも参加したりと、学びが広がっています。**

｜ 学び合い文化が最大の魅力。自分をさらけ出すことで学びが深まる

マナビDX Questで一番学びになるのは**人と人との学び合い**です。学び合うためには、まずは自分からさらけだしていくことが大事だと思います。自分から書いたコードを投稿したからこそ、受講生の仲間に添削してもらえ、それがきっかけとなってジョブチェンジしたように、**自分をさらけ出すことによって学びが深まり思わぬところへ辿り着けるのではないのでしょうか。**

また、PBLの順位を競うなどいい意味での競争があるのもいいところです。学生時代の競い合いを思い出しておとなの青春を味わえます。ぜひ自分をさらけだして参加してほしいです。



山田ふみのさん
修了生の声



jinjer株式会社 マーケティング部 山田ふみのさん（1/3）



経歴/ご経験

- ・ クラウド型人事労務システムを提供する事業会社で、マーケティング業務に従事
- ・ DX関連の情報を発信するWebメディアを立ち上げ

DXコンテンツを発信する業務に携わる中で、DXプロジェクトの流れを模擬的にでも体験したかった

クラウド型の人事労務システムを提供する会社で、DX関連のWebメディアの運営やコンテンツの発信の業務をしています。マナビDX Questに応募した当時もこの業務をしており、当時の課題として、**DXの情報発信に携わっているもののDXの実務に関する知識やスキルの不足を感じていました**。営業担当はお客様のDXに寄り添って仕事をしていますが、私の業務は、そこからは少し遠い位置にありました。そこで、**自分もDXのプロジェクトの流れを模擬的にでも体験したい**と思い、マナビDX Questに応募しました。



jinjer株式会社 マーケティング部 山田ふみのさん（2/3）

“

自身が講師を務めるなどDX支援に携わるほか、DX推進者の輪を広げるべく「DX Action」の企画を立ち上げ

社内でも、上司に「マナビDX Quest参加しました」、「今こんな課題をやっています」ということを報告していました。PBLが楽しくて、ことあるごとに報告していたからか、いつの間にか「DXを頑張っている人」という社内認知に繋がりました。その結果として、**DXに関する依頼や相談をもらうことが増えたり、弊社が実施しているプロボノのDX支援プロジェクトに誘ってもらったりする機会が増え、自治体の社会福祉協議会さんでDXの講師をしたりと、思わぬ活動へ展開しました。**

そんな活動が広がるなか、**「DX Action」という企画も立ち上げました。**これは、さまざまな企業様に「DXを推進していきます」という宣言をしてもらい、世の中に発信していこうというプロジェクトです。参加企業様からもプレスリリースを発信いただいたおかげで、認知が広がっていきました。**この企画を立ち上げたときも、マナビDX Questで学んだプロジェクトの進め方が活きました。**プロジェクトの意味や実現のためにどうしたらいいかを考え、ネゴシエーションしていく流れは、どんなプロジェクトも一緒だと感じます。マナビDX Questでプロジェクト推進の一連の流れを理解していたので、それが役立ちました。

また、この企画は**「DX推進者の輪を広げていきたい」という思いから始まりました。**これはマナビDX Questの受講生との会話や、イベントで企業協働のお話を聞いていく中で強く実感したことです。DXを実現するためにはまず、DX推進者の想いを束ねることが必要なのではないかと考えて企画しました。



jinjer株式会社 マーケティング部 山田ふみのさん（3/3）

“

単なるフレームワークの学習に留まらず、リアルな事例にあてはめて考えることで、日常業務にも活きる学びに

「DX Action」の企画の推進でも、マナビDX Questで学んだビジネスフレームワークが活きました。ただフレームワークを学ぶだけではなく、プロジェクトの各局面でどういうことを考えてどういうことに悩むのかを模擬的に体験でき、それをリアルな事例に当てはめて考えられたのが大きかったです。

また、普段行っているマーケティングの仕事では出会わないような他業種、たとえば、ねじの生産計画や受発注在庫予測などのデータを読み込むことから始まるので、他業種の独自のビジネス文脈への理解も広がり、日常業務でも視野が広がったように思います。

コミュニティ内で成果物に対する相互評価を実施したことで、新たな考え方を学び、自身の強み弱みも把握できた

マナビDX Questの学び方の良さは、座学と実践の間であるということだと思います。実践よりも参加のハードルを感じずに飛び込むことができ、参考書を読む以上の実践的な学びを得ることができます。

また、コミュニティで課題のアウトプットに対して相互評価し合うのも特徴的ですし、とても学びになります。自分自身の強み・弱みを客観視する良いきっかけになりました。相互評価ではいろいろなコメントをもらえるのですが、私の場合は、数値やロジックはまだまだ弱いところがあるが、資料が読みやすいという点を評価していただくことが多く、改めて自分の強み・弱みを把握することができました。この強み弱みの把握は、日常業務でも生きています。また、他の参加者のアウトプットを見ることで、今まで気づかなかった視点や考え方を学ぶことも多くありました。



戸田和子さん
修了生の声



個人事業主 戸田和子さん（1/3）



経歴/ご経験

- ・ 大学卒業後、外資系海運企業で法人営業などに従事。退職後、主婦、パート勤務を経て、フリーランスとして活動
- ・ AIやDXに関する知識はほとんどない状態でマナビDX Questに参加
- ・ デジタル分野のリスキリングでDX推進をサポートする新しい働き方を創ろうと起業準備中

“新しい価値提供をする仕事で世の中にもっと役立ちたい”という思いで、マナビDX Questに参加

以前は英語の強みを活かして海運会社で働いていましたが、育児のため退職し、フリーランスで翻訳や資料作成などの仕事をしていました。そんな中、コロナ禍で人に会わなくなったこともあり、世界が狭くなっていくような、将来への不安を感じていました。“世の中がデジタルで変わってきている中、人から依頼された仕事をしているだけでいいのか”、“**新しい価値を提供する仕事で、世の中にもっと役立てるのではないか**” **そんな思いがありました。**そこで最新のIT事情をいろいろ調べている中でマナビDX Questを知り、こんな悩みを抱えている自分でも何か変わるのではないかと、思い切って参加しました。

喰らいついていった先に辿り着いた成長実感、共にハッカソンに参加できるような仲間もできた

参加してみると、最初はなんだか場違いなところにきてしまったと思いました。AIでの需要予測のPBLに参加したのですが、参加者の9割は会社員で、フリーランスの私はマイノリティでした。それでも、他の受講生の皆さんからはとてもフラットに接していただき、場違いという思いは次第に薄れていきました。



個人事業主 戸田和子さん（2/3）

“

ただAIの課題はとても難しく、最初は学んだらどうなるか学びの成果もイメージできず、Pythonに触れるのも初めてでとても苦労しました。でもそこでめげずに、**自分なりに学び、slackで積極的に質問していくと、他の受講生の皆さんが優しく教えてくれて、少しずつAIの学び方を掴んでいくことができました。** そのように喰らいついていけたのは、フリーランスで比較的時間があつたからと、励ましてくれる人が多かったからだと思います。私と同じようにゼロから始めた人もいたことも励みになりました。その後も、マナビDX Questで出会った仲間たちとハッカソンに参加する等、学びを継続してきました。そして2023年に再度マナビDX Questに参加しているのですが、AI課題に対して初心者ガイドを見ずにゼロから自分で解決できました。**初心者から1年でここまでできるようになったんだと、自分の成長を実感できてとても嬉しかったです。**

| いろいろな立場を越えてフラットに意見を持ち寄る、多様性あふれる環境

マナビDX Questでは、**誰かに教えてもらうのではなく、意見を持ち寄って“あーだこーだ”と議論し、いろんな立場の意見が聞けることがとても学びになります。** 例えば、業務改善の課題に対して「効率化して業務にかかる時間が減ったパートさんはどうする？」と話題になったときに、ある受講生の経営経験者の方が人を解雇する辛さを語られて、そのような視点もあるのかと気づきを得られました。**会社の中のDXや利益という視点だけでなく、いろいろな視点から、どのような変化があれば社会や会社が良くなるのかを考えることができたことは大きな学び**でした。

また、学びのコミュニティの規模が大きいこともあり、どこかに共感者がいることも大きいです。リアルにフラットにものが言い合える関係は貴重です。



個人事業主 戸田和子さん（3/3）

“

マナビDX Questでの経験を経て、「おかんDX」で起業準備中。世の中のトランスフォームに貢献したい

現在、マナビDX Questでの経験からDX推進を支援する「**おかんDX**」で起業しようと準備中です。企業協働で実際の企業様とお話すると、実情はDXのかなり手前の「デジタル化」のところから悩んでおられていることに気がつきました。DX経験が比較的浅い私にできる「課題の切り分け」「エクセル改善」「ローコードアプリ」等でも、かなりDXにお役立て頂けることが分かってきました。そこから、**女性・主婦・フリーランスの方々を束ねた“おかんDX”の集団をつくれれば良いのではないかと着想し、邁進しています。**

起業1年目は、まずは企業側のニーズの解像度を上げることから、具体的にはどれくらいのフィーが頂けて、“おかん”たちにいくらなら働いてもらえるのかを見定めたいと思っています。並行して、セミナーや講習会を開いたりして“DXおかん”を増やしたいと思っています。**世の中では人手不足といわれて久しく、おかんたちをリスケリングで引き上げられたら世の中が変わるのではないかと、全国に救える方がたくさんいるのではないかと**想像しています。DXで大事なものはデジタルではなくてトランスフォームのほうだと思っています。おかんも世の中もトランスフォームできるよう、自分の経験をもとに発信していきます。



宮野孝汰さん
修了生の声



中部国際空港株式会社 スーパー・スマート推進部 宮野孝汰さん（1/4）



経歴/ご経験

- ・ 文系から新卒入社した会社で、経理部を経て社内システムの企画・開発・運用保守を担当
- ・ マナビDX Quest参加中に転職し、現在は中部国際空港にて空港内・社内のDX推進業務に従事
- ・ 社内外問わず、IT全般（直近では生成AIなど）の社会への普及に向けて活動中

実力を客観視するために、外部の人との交流機会を求めてマナビDX Questに参加

前職時代に情報システム部に配属されました。文系卒の私は驚きつつも独学で学んでいたのですが、次第に外部の人の“声”が聞きたいと感じるようになりました。果たして自分の知識は足りているのか。外部の人たちがどのようなレベルで、どんなプロジェクトを推進しているのか。そんな客観的な知見が必要だと考えたのです。そんな時にG検定などの資格者コミュニティを通じてプログラムの存在を知り、参加してみようと思いました。自分自身のキャリアアップを図りつつ、他者の働きぶりを観察し、そこから繋がりや学びを得ることが大きな目的でした。



中部国際空港株式会社 スーパー・スマート推進部 宮野孝汰さん（2/4）

“

「お客様に近い現場でDXを推進しよう」と転職を決意。マナビDX Questに参加していたことも後押しに

デジタル技術が急速に発展する時代において、どんな状況になっても求められる人材になりたいと考えていました。一方、ひとつの会社しか知らないために自分の思考やスキルセットが固まってきているギャップも感じるようになりました。**新しいことを柔軟に取り入れ、自分のスキルや経験を磨き続けたい**と思い、転職しました。

「お客様に近い現場でDXを推進してみたい」という思いから空港運営会社のDX推進部門に転職しました。並行してマナビDX Questで学習していたので、**得られたスキルを転職先で活かすことができるかもしれないという思いも転職の後押しになった**と思います。

転職後は社内の業務効率化に限らず、データを用いたデジタルマーケティングの企画、AIモデルの作成やAIサービスの社内導入など幅広く担当しています。AIモデルの作成については、例えば駐車場の混雑を予測するモデルを構築しました。**マナビDX Questで要件整理やゴール設定、プロジェクトの管理・推進などを一気通貫で学んだことで、他部署が抱える真のニーズを引き出すことができ、モデルの構築をスムーズに進めることができました。**



中部国際空港株式会社 スーパー・スマート推進部 宮野孝汰さん（3/4）

多動力・連携力という自分の強みに気づき、日本中のデジタル人材を繋ぐ 「マナビDX Quest修了生コミュニティ」を立ち上げ

外の人たちと関わることで、自分のスキルにまだまだ足りない部分があることを痛感しました。マナビDX Questには**データ分析、資料作成、ビジネスサイドの観点からも、自分では気付けない知識や経験を持っている方が多く**、とてもわくわくしました。その刺激を受けて、データ分析のコンペに参加したり、プレゼン資料の構成が上手い人の技を真似たりするようになりました。

2022年度プログラム終了後、**マナビDX Questで出会ったメンバーと一緒に修了生コミュニティを立ち上げ**ました。マナビDX Questプログラム参加者に対して毎日のようにイベントを開催することで、自分がプログラムを通じて得られた仲間と出会う契機を皆さんにも体験してもらうことを目指しています。また、そのような活動を通じ、自分自身も多くの人と会話する機会が生まれました。その縁から参加者同士の企業でDX講習会を共同企画するなど、新たな協業の機会を得ることができています。

多様な人材の接点作りを通じて、いずれは日本中のデジタル人材が切磋琢磨できる場を作りたいと考えています。また、それを通じて日本のデジタル人材の底上げに貢献したいと考えています。



中部国際空港株式会社 スーパー・スマート推進部 宮野孝汰さん（4/4）

“

人と出会うことが設計されたプログラムであることが、マナビDX Questのユニークさ

マナビDX Questの特徴は、無限に人と関わりを持てるコミュニティにあると考えています。slackなどのテキストコミュニケーションツールは他のコミュニティにもありますが、マナビDX Questはイベントの頻度が高く、他の人との関りを深めるためのツールが充実していると感じます。私自身の経験から、人と出会うことが想像以上に活動の幅を広げてくれると実感しています。

スキルを身につけたくて参加することは当然ですが、技術の広げ方や自分自身の強みを模索している人にも向いているプログラムだと思います。一般的に技術コミュニティは目的が限定的であることが多いですが、多様なバックグラウンドの方を受け入れる、ある種の“ゆるさ”が魅力だと感じます。全く予想しなかったインプットを得ながら学びあうというマナビDX Questの面白さを、ぜひ感じてもらえればと思います。